

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※	甲	第	号
------	---	---	---	---

氏 名 山本啓之

論 文 題 目

Clinical and neuroimaging findings in children with posterior reversible encephalopathy syndrome

(小児の可逆性後頭葉白質脳症の臨床所見および神経画像所見の検討)

論文審査担当者

主 査

委員

委員


委員

指導教授

名古屋大学教授

勝野 雅央 


名古屋大学教授

長 紀 恒 乙 

名古屋大学教授

若 林 俊 彦 

名古屋大学教授

小 島 啓 二 

論文審査の結果の要旨

今回、小児の可逆性後頭葉白質脳症 (PRES) 40 例について臨床所見および神経画像所見を集積し、発症、後障害に対する危険因子を検討した。対象の年齢は 2 歳から 16 歳で、基礎疾患は血液・腫瘍性疾患が 20 例、腎疾患が 14 例、その他 6 例であった。急性期に呈した症状はけいれん発作が 31 例、意識変容が 25 例、視覚異常が 11 例、頭痛が 10 例であった。4 例で慢性期にてんかんを発症していた。急性期に ADC map は 29 例で撮像されており、13 例で ADC の低下を認めた。慢性期に MRI がとられた 26 例のうち 13 例で萎縮、グリオシスを認めていた。萎縮、グリオシスと急性期の臨床症状、画像所見で有意な相関を認めたのは ADC の低下のみであった。急性期の ADC の低下は PRES の後障害の危険因子と考えられた。

本研究に対し、以下の点を議論した。

1. ADC map が撮像されていた 29 例のうち 9 例で皮質にも病変を認めていた。皮質におよぶ病変は痙攣発作の影響なども考慮されるが、皮質に病変を認める例と認めない例と比較して臨床症状および慢性期の萎縮、グリオシスに有意な相関は認めなかった。主体は白質脳症であるが、皮質に病変がおよぶものは一定数存在すると考えられた。
2. ADC の低下は ADC 値の測定など客観的な評価ができると理想的ではあったが、後方視的な検討であり、すでに画像化された MRI データのみ検討しており不可能であった。経験をつんだ小児神経科医複数名で視察的に評価することで妥当性を担保した。評価方法としては可能なものに関して対側の対応する脳部位と比して ADC 低下を判断した。
3. 慢性期の MRI を撮像する時期が一定でなく、経時的に評価できた症例が少ないため、どの時期にグリオシスを呈したかは不明であるが、グリオシスを呈した症例は発症後 2 年以内に慢性期の MRI が撮像されており所見を認めていた。また、てんかんと相関に関してはてんかんを発症したのが 4 例のみであり統計学的な有意差は認めなかったが、一般人口におけるてんかんの有病率を鑑みると多く発症しており、相関があることが推察される。

以上の理由により、本研究は博士（医学）の学位を授与するに相応しい価値を有するものと評価した。

試験の結果の要旨および担当者

報告番号	※甲第	号	氏名	山本啓之
試験担当者		主査	勝野雅夫	長紀礼
		指導教授	小島啓	若林俊彦

(試験の結果の要旨)

主論文についてその内容を詳細に検討し、次の問題について試験を実施した。

1. 病変が皮質までおよぶ症例と予後との相関について
2. ADCの低下をどのように評価し、検討したか
3. グリオーシスを生じる時期およびてんかん発症との関連について

以上の試験の結果、本人は深い学識と判断力ならびに考察力を有するとともに、小児科学一般における知識も十分具備していることを認め、学位審査委員合議の上、合格と判断した。